

## 第18回日本科学史学会西日本研究大会プレ企画・公開シンポジウム

### 「放射線の健康影響問題を歴史学の観点から捉え直す」

主催： 第18回日本科学史学会西日本研究大会／日本科学史学会生物学史分科会／  
広島大学大学院総合科学研究科「資源・エネルギー問題の総合科学的研究」プロジェクト／同研究科「リスクの総合科学的研究」プロジェクト

日時： 2014年12月13日(土) 13時30分～17時（13時開場） **入場無料**

場所： 広島大学東千田キャンパス S205教室（広島バス・日赤前／広電・日赤病院前）

#### シンポジウム開催趣旨

東電福島第一原発事故から3年半以上経過した今日、懸念されていた小児甲状腺がんの増大がしだいに明らかになってきました。環境省の専門家会議でも疫学の専門家が被曝による多発の可能性を指摘し対策の必要性を主張しました。しかし、これまで100ミリシーベルト以下の被曝では健康影響はないと主張してきた原子力災害専門家グループや放射線安全論の側に立つ専門家たちは、「スクリーニング効果」や「過剰診断」を理由に、小児甲状腺がんの増大が被曝によるものとは今のところ認めていません。さらに、放射線を避けるため避難生活を続けることの方がかえって健康被害を大きくすると主張することで汚染地域への帰還促進政策をサポートしています。放射線安全論を基礎にした住民帰還の政府方針はICRPやIAEA等の国際機関によっても強力に後押しされています。

本シンポジウムは、以上のような放射線安全論や汚染地域への帰還政策の是非という現今の焦眉の問題を吟味する上で欠くことのできない歴史的事実の確認と考察を行うために企画されたものです。その際、安全論の側に立つ専門家たちが依拠している理論や考え方に対する科学的・方法的検討に止まらず、低線量被ばくに関する科学的不確実性や社会的価値の多様性、特に被害者の権利という観点からも検討がなされるべきだと思います。また、本シンポジウムのシンポジストの多くは科学史家です。科学の問題を歴史学の観点から改めて検討することは、安全論、危険論を問わずこれまで「純粋科学」の問題とされてきた放射線被ばくの評価と対策を、それに固有な歴史的な脈に即して論じるという新たな手法をもたらすかも知れません。そのためには、科学者と科学史家の協働も必要です。本シンポジウムがそのような新たな研究手法の出発点となることを期待するとともに、学術的なシンポジウムではありますが、研究者や教員に限らず、この問題に関心を寄せる多くの市民や学生の参加も呼びかけたいと考えます。

#### プログラム

- 13:30 主催者代表 市川 浩（広島大大学院総合科学研究科教授） 開会挨拶
- 13:35 コーディネーター 藤岡 毅（同志社大学嘱託講師） シンポジウム趣旨説明
- 13:45 講演① 山内知也（神戸大学大学院海事科学研究科教授）  
小児甲状腺がん検査結果を推定被曝線量よりも重視する必要性について  
～チェルノブイリの経験と福島の状況から～
- 14:20 講演② 高橋博子（広島市立大学広島平和研究所講師）  
米原子力委員会生物医学部の放射線人体影響研究について
- 14:55 休息
- 15:10 講演③ 樋口敏広（京都大学白眉センター特定助教）  
国際放射線防護体制の形成：一般の人々の被ばくをめぐる『知の交渉』
- 15:45 討論司会 柿原 泰（東京海洋大学准教授）  
コメント① 沢田昭二（名古屋大学名誉教授）  
コメント② 中原聖乃（中京大学社会科学研究所特任研究員）  
討論
- 16:50 全体のまとめと閉会挨拶（柿原 泰）
- 17:00 閉会

★閉会后、広島市内で懇親会を予定しています。

★文責&問い合わせ 藤岡(e-mail:jcf10563@nifty.com, tel:090-5056-4604)